



浪漫'S

見参！ 桜子姫

藤 水名子

MINAKO FUJI

浪漫's

ロマンス

見参! 桜子姫



藤 水名子

MINAKO FUJI

集英社

浪漫's

ロマンス

見参! 桜子姫

1997年3月20日第1刷発行

著者 藤 水名子 (ふじみなこ)

発行者 小島民雄

発行所 株式会社集英社

〒101-50東京都千代田区一ツ橋2-5-10

電話

編集部 (03) 3230-6100

販売部 (03) 3230-6393

制作部 (03) 3230-6080

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 文勇堂製本工業株式会社

著者との諒解により検印は廃止いたします。

定価は帯およびカバーに表示してあります。

乱丁・落丁の本が万一ございましたら、小社制作部宛にお送りください。

送料は小社負担でお取り替えいたします。

本書の一部あるいは全部を無断で複写・複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

©1997 Minako Fuji, Printed in Japan ISBN4-08-774257-1 C0093

C O N T E N T S

桜子逍遙 (さくらこしょうよう) 5

陋巷暗雲 (ろうこうあんうん) 51

女賊跳梁 (じょぞくちょうりょう) 93

妖異・髑髏壺 (ようい・どくろつぼ) . . . 137

浪士憂情 (ろうしゆうじょう) 181

乳母殿の恋 (うばどののこい) 227

装画／村上 豊
装丁／藤村雅史

浪漫²S

ロマンス

見参! 桜子姫

桜子逍遙

さくらこしょうよう

「これでどうだい？」

「まだまだ……」

「長さがいまひとつかな」

「それにもちっと、頑丈なほうが」

「暴れられたら、ことだからな」

問題は、紐の長さでもあり、且つは適度な太さでもあった。

「じゃあ、これは？」

「あぶねえな」

仮に、熊と八とでもしておこう。

齡の頃なら三十がらみ。言わずと知れた満面髭面の、人の二、三人は確実に殺していそうな御面相。素肌に纏った黒法被の袖は二の腕の上まで腕まくり、絡げた裾から薄汚れた下帯の先もチラチラと覗き、露わな毛髭の醜さといったらない。

見るからに品性卑しげな二人の男たちが、ともに額を突き合わせ、ヒソヒソと密談の真っ最中だった。

しゃがみこんだ土間の傍らには、安手の辻駕籠が放りだされたままである。
ねじり鉢巻きに揃いの法被――。

そう。なにを隠そうこの二人、上野から下谷あたりまで、広小路界限を稼ぎ場とする駕籠舁き人足にほかならない。

ところが――。

「畜生ッ。この肝心なときに、縄の一本も家にねえとはな」

「しょうがねえ、扱きを繕い合わせて、三本も繫げばなんとか……」

今日のががりの勘定よりもまだ真剣な面つきで交わし合う言葉は、仕事帰りの駕籠屋同士のものにしてはどうも奇妙だ。それに、家中の紐という紐をかき集め、あれでもないこれでもないと検討するらしい姿もどこか不穩。

「久々の上玉だぜ」

「二人でたつぷりと愉しんだあとは、女郎屋へ……」

「あれくれえの別嬪なら、吉原の大見世でだって充分な値がつくつてもんだ」

「今日はまったくツイてるぜ」

「こっちのほうは、少々足りねえらしいけどな」

とやや太り肉で色の黒い熊のほうが、右の人差し指に自らの頭を指しつつ言えば、

「なあに、そのほうが、いっそこっちも好都合つてもんよ」

少し痩せ気味な狐顔の八が、ニタリと笑って歯を見せる。

言い交わす彼らの手の中には、女物と思われる赤や黄色の扱き帯が幾本もあった。それらを繕って、結んで、長い一本の繕い紐に仕立ててゆく作業に、しばし二人は没頭する。

本来の生業である駕籠舁き仕事のときにだって見せないに違いない真剣な顔つきであった。

斯くて、……しばしのときが流れる。

「大変そうじゃのう」

不意に、部屋と仕切りの障子が開かれ、一人の美女がひょっこりと顔を出す。

「手伝つてとらそうか？」

屈託のない、若やいだ笑顔であつた。

齡の頃なら十九か二十歳。艶やかな黒髪は、結わずに赤い丈長で一つに束ねただけ。その身に纏うた、浅紅色の牡丹を二重に織り出した金襴は、目鼻だち鮮やかな彼女の顔だちにもよく似合うが、如何せん派手すぎる。ひと昔前なら兎も角、諸事儉約を旨とする昨今の御時世では、廓の大夫たちだって憚つて用いないに違いない。況してや堅気の町娘、武家の妻女であれば、氣恥ずかしくて、到底袖を通せはしまい。

そんな風体に加えて、

「如何すればよい？」

まるで男の、それも折り目正しい武士のような口調で喋るものだから、一見しては、一体どういう出自の、どういう類いの女なのか、極めてわかりづらかつた。

「その紐を、縫つて一つに結べばよいのか？」

「い、いいえ、滅相もない。……お姫様にそんなことをしていただいちゃあ、罰が当たりまさあ」

「どうかお氣になさらず、そちらでお休みになっておくんなさい」

氣軽く土間へ降りて来て、二人の仲間に加わろうとする女の手を、彼らは慌てて止めにかかつた。

「しかし、この仕事がすまぬうちは、播州へは発ってくれぬのであろう？」

「そ、それは……」

「遠慮するな。苦しゅうないぞ」

と、飽くまで邪氣のない可憐な笑顔で言われて、熊八は、互いに顔を見合わせた。

少々オツムが弱いらしいとは思っていたが、まさかここまで、おめでたいとは思わなかった——。
呆氣にとられた二人の男は、ほぼ同じ瞬間、寸分違わぬ同じ感想を得たに違いない。

（お、おい、こうなったら、てっとり早く……）

（騒がれねえように、まずは口を塞いでから）

（それから両手を、後ろ手に縛って……）

（おめえが頭を押さえつけてるうちに、俺らが足のほうを……）

目顔で見合った僅かのあいだに、忽ち無言の談合がまとまった。

そうと決まれば、氣づかれぬようそろそろと動いて、熊は女の右側へ、八は左側へと、それぞれが負った役割をはたすべく、素早くその身を処してゆく。

「できたぞ。……これでよいのか？」

とりどりの扱きで作った一本の長い縊り紐を両手にキュツと伸ばしつつ、女が言ったその瞬間——。

（いまだ！）

男たちの両目が、脂ぎったようにギラリと光った。

が——。

「そうじゃ！」

不意に女が立ち上がり、ツイと彼らに背を向けてしまったから、たまらない。

パッ、

と素早く身を翻し、同時に女へ襲いかからんとしていた熊八コンビ、肝心の目的物を失って、忽ち額を打ち合わせる羽目となる。

「楓^{かえで}のことを、忘れておった。……はぐれて、道に迷わねばよいが」

立ち上がりぎまに、女はふらりと、土間の端を歩いた。

悪人顔の駕籠昇きたちがそのときどういふ態度に出ようと、もとより知ったことではない。心配顔に独りごちた女の視線は、そちらを見向きもしなかった。

熊と八は、ともに土間へ蹲^{うずまつ}った姿勢から、無念の面つきで女を見上げた。

彼らの誇る、ものの見事な人相の悪さは、即ち彼らの中身をも、如実に物語っていた。駕籠昇き仕事を始めて、もうかれこれ七、八年近くになるが、この間お客を駕籠に乗せているより、自分たちがお客の上に乗っているほうが長いという、彼らは実に不届き千万な駕籠昇きだった。お客には、吟味に吟味を重ねた揚げ句、常に若い娘しか選ばなかった。こっそりと人気がない場所へ連れ込んで手ごめにするくらいは朝飯前。ときには、遊郭へ売り飛ばすという悪行をもしてのける。

いまだって、最前街角で拾ったこの奇態な美女を、二人がかりでさんざんに弄^{もてあそ}んだ後、高値で遊郭へ売り飛ばさんものと、穏やかならぬ思案を固めているのだ。そのために必要な抜きであり、頑丈な縊り紐だった。

かくて完成した縊り紐は、屈強そうな熊の手に、いまや遅しと握られている。

「お乳母^{うはは}様のことなら、なにも心配は要りませんぜ。おつつけ追いついて来ませう」

揉み手の低姿勢で八が言い、女の注意を引きつけたところで、そっと背後から忍び寄った熊が、まさにその縊り紐を、彼女の体へ打ち掛けんとしたその刹那^{せつな}——。

「姫様ッ」

呼び声とともに、表の障子がカラリと開け放たれた。

七十がらみと見える武家の老女が一人、勢いよく飛び込んでくる。渋い茶縮緬^{ちやぢりめん}の裾から、あまり見たくはない水色蹴出しを覗かせるほどに、甚^{はなは}だ裾を乱していた。切り髪の白い毛束をゆらゆらと

揺らし、真っ赤に上氣した顔で、息も激しくきらしている。

「楓」

「ご無事でいらっしやいましたか、姫様」

ホッとひと安堵の表情とともに、多少呼吸を整えてから、

「これ、そのほうども——」

老婆は即ち、二人の駕籠昇きへ、鋭く、一瞥、視線をくれた。

「この、慮外者どもめッ。……来年には古稀を迎えようというこの足弱のばばを置き去りにして行くとは、如何なる料簡じゃ」

「……………」

老婆の氣迫に一瞬吞まれ言葉を失くしてから、だが熊と八の二人は、突如その面つきを一変させた。

「畜生ッ」

「こうなりやもう、ババアをぶち殺して、とつと女をふん縛るまでよつ、熊ッ」

「おうッ」

相棒の掛け声に励まされ、大柄な熊の体が小さくとび跳ねた。目指す女の娜やかな肢体は、長く手を伸ばしたその半歩先にある。

「姫様ッ」

老女の金切り声が高くはりあげられたとほぼ同じ瞬間——。

どずっ、

鈍い殴打の音とともに、熊の鳩尾へ、女の右肘が深く食い入り、彼の呼吸を一瞬間止めさせた。「なにをいたす、慮外なッ」

「お氣をつけなされませ。この者共、姫様に害を為さんとする不逞の輩にございまするぞ。或いは暮林の手の者かもしれませぬ」

「なに、暮林の？」

美しい姫君の顔つきが俄に変わった。

老女の言葉に触発されたというよりは、身に迫る危急の事態に、知らず体が反応したのだ。

「……………」

声も発せず足下から襲いかかった八を、姫君は、容易く裾を捌きざまあつさり蹴倒した。

「姫様、これを！」

老女が、両手に捧げていた細長い紫色の風呂敷包みを解けば、中からは、朱い下げ緒の、拵えのいい刀の大小が現れる。その脇差のほうをやおら取り上げるなり、姫君へ駆け寄って手渡した老婆の早業は、倒された男たちが身を起こそうとするまでの、ほんの一瞬をも要さぬものであった。

「おのれ！ につくき逆臣、暮林蘇芳。三日月藩七万石のお家乗っ取りを企み、飽くまでこの桜子を亡き者にせんとくわだてるか！」

「殺してはなりません、姫様ッ。この者どもは、後々までの生き証人！」

「わかつておる、楓。……止め太刀をしようほどに」

言いざま姫君が、スラリと脇差を抜き放った。翳された刃に忽ち二人の悪党面を映すその清冽な白刃は、むろん稀代の大業物。銘は宗近、山城鍛冶。その通称を『名物三日月』と称す。もつとも、年代物の古大刀をいまは用いず、室内なので、とりあえず堀川国広の脇差のほうを抜いた。その鞘を、傍らへ来た老女の手に渡しつつ、姫君は隙もなく構えをとる。

「……………」

駕籠昇きたちは、呆氣にとられた。

もうぼちぼち、仕事もあがろうかという火灯し頃の夕暮れ時。

「乗せてもらおうか」

若い娘にしては些か尊大とも思えるそぶりで辻駕籠を呼び止めたその女をひと目見るなり、しめた！ と北叟笑んだのは彼らのほうである。

しかもその行く先は、

「播磨の国は三日月のご城下まで」

だと言う。

三日月などという藩の名前は、広小路界限にたむろする講釈師の口からだって聞いたことはなかった。芝居・講談では毎度お馴染み『忠臣蔵』の赤穂藩も、同じ播州の小藩だったが、当主が殿中で刃傷沙汰の後、遺された元藩士たちが仇の屋敷へ堂々討ち入るという空前絶後の大事件さえ起こらねば、江戸の市民はろくにその名を覚えることもなかったに違いない。

「我は、三日月藩主、森長国が娘、桜子」

と自ら名乗るだけあって、確かに、身に着けているのは上等の絹と錦だ。

大方頭の弱い大家の娘で、ふらふらと座敷牢を抜け出してきたものと思われた。泥人形に仕立てて苦界へ沈めるにはお誂え——との不遜な胸算用に愈々歎び、二人は娘を駕籠へ乗せた。邪魔な同行の老婆は途中でまいて、まんまと塙へ連れ込んだまではよかったが。

少々頭が弱いどころか、まさか、刃物を振りまわす危険な狂人とは夢にも思わなかった。

「覚悟せよ」

「う、うわあーっ」

だから二人は、その鋭い切っ尖が自分を目掛けて振り下ろされてくるのを待たず、揃って彼女に背を向けた。

「待てい！」

待てる道理がなかった。

二人は逃げた。

躍り上がるようにして表へ飛び出すと、揃って街路を駆けはじめた。

あとはもう、誰が何と言おうと、走りを止めるつもりは毛頭なかった。

「なんだ」

ホッと小さく吐息をつきつつ、桜子は脇差を鞘へ納めた。

納めたものを、青い浮線綾ふせんりょうの西陣帯のあいだへと無理矢理ぶちこみ、更には楓の手に残る宗近の大刀をも取り返してともに佩おびると、颯々ささたる足取りの歩を進め出す。

「情けない奴らじゃのう」

「したが、まだまだご油断はなりませぬぞ。何処どこに後詰めごの伏兵を隠してないとも限りますまい。

……一刻も早く、ここを立ち去らねば」

「そうじゃのう」

楓の言に素直に従い、桜子は、その駕籠屋の店を出た。

店とはいっても、それほど大層なものではない。

一、二間程度の手狭な土間に、人足二人の宿所も兼ねているため、奥に一部屋、畳敷きの間を用意してあるが、それとて無人の廃屋を思わせる荒れ加減である。

「甘言を弄もよほして廃屋に誘い込み、人知れずこの身を害そうとは、おのれ逆臣暮林！　なんたる悪辣あくろう、なんたる卑怯！」